

# 工夫して、指導していきましょう。

石井康雄（前船橋市立金杉台小学校 校長）

Q

2年生「しきと計算」では、どのような指導をしたらよいでしょうか？

A

1つ前の単元「見方・考え方をふかめよう」の学習が基礎になります。では、両者の違いは何でしょうか。「見方・考え方をふかめよう」では、順に考える仕方のほかに、増えたり減ったりした量に着目して、それらをまとめて考える仕方があることを学習しました。「しきと計算」では、まとめて考える仕方を（ ）を使って式に表し、順に考えて表した式と等号でつなぐことで、計算法則として捉え直していきます。つまり、数量に対する見方・考え方を式に表すことで、どんなときでも成り立つたし算のきまりとしてとらえさせる指導になります。

計算の順序を変えても答えが同じになることは、本単元を通しておさえていますので、等式で $17+6+4=17+(6+4)$ と表現できることに重点をおきましょう。その際、 $=$  や（ ）の意味と使い方が理解できているかを確認することが大切です。また、（ ）を使うよさは、わかりにくいかもしれませんが、計算が簡単になることを感じれば、理解できるでしょう。

Q

2年生「かけ算（1）」では、どんなことに気を付けて指導をしたらいいのでしょうか？

A

かけ算の学習では、まず、「同じ数のものがいくつあるか」という新しい見方・考え方を指導します。そして、かけ算九九を構成し、その習得を行っていきます。九九を暗記させることは大切なことですが、「1つ分」に着目し、それがいくつあるか、もしくは、その何倍かという見方・考え方は「割合」の概念の基礎になりますので、このことの重要性も忘れてはいけません。

P 3～4の挿絵は、どの子も一度は経験したことがある遊園地の風景です。そのときの体験を思い起こさせながら、楽しく学べるように工夫されていますので、形式的な概念指導にならないようにしましょう。

P 6からは、式に表す指導をしていきますが、記号「×」のかき方も繰り返し指導してください。かけ算の答えは、「同じ数のものがいくつあるか」という意味に基づいて累加（たし算を繰り返す）で求めます。この大変さを経験することで、かけ算九九のよさを教えることができます。

P 10～11では、「割合」の基礎となる「何ばい」という見方・考え方を指導します。P 12からのかけ算九九の構成は、1年生P 34の「10よりおおきいかず」に出てくる、サクランボを「二、四、六、八、十」と2個ずつ数えたり、バナナを「五、十、十五、二十」と5本ずつ数えたりした経験が素地になります。そのため、5の段と2の段が最初に位置づけられています。かけ算九九の言い方をひと通り教えてから、九九を覚えさせていきます。九九を覚えさせるには、九九の計算カード、教科書のQRコンテンツを使うことをお勧めします。

また覚えさせ方として、九九のカードを教室の出入り口に掲示する、保護者の協力を得て家の中に掲示してもらうなど、かけ算九九を何度も繰り返し唱える機会を与えるようにするとよいでしょう。九九を聞かれたら、すぐに答えが言えるよう、上がり九九（通常の九九）、下がり九九（逆向きの九九）やバラ九九（フラッシュカードなどによる）といった、指導に工夫を入れていきましょう。QRコンテンツは、上がり九九と下がり九九の両方に対応できます。

「かけ算（1）」の最後には、P 24のりこさんの吹き出しのような感想を拾い上げて「かけ算（2）」へと自然だらかに移行していきます。なお、 $2 \times 3 = 3 \times 2$ のような答えが同じになる計算は、「九九のきまり」で指導することになりますので、この時点では深い入りする必要はありません。